会　報

ＴＵＷＶＯＢＧ会　　Ｎｏ．５５　２０２５．１．１３

◆コロナ禍が落ち着いたので、2025 年 1 月 25 日（土）14:00 ～ 16:00 に新橋亭で新年会を開催します。
◆公式サイト　http://tuwvob.yamagomori.com/　（新しくなりました）
◆メールアドレスの変更はＯＢＧ会幹事（２６期 伊田）までご連絡ください。
date.hiroyuki@icloud.com
◆女性の卒業生もいるので、公式には「ＯＢＧ会」とします。みなさんから寄せられた名称は原稿通り「ＯＢ会」とします。

お知らせ　新役員体制となりました

２０２４年１月２７日、東京・新橋亭で開かれた新年会で役員の交代を決めました。「若返り」と、事実上、佐藤拓哉さんがお独りで担ってきた実務の分散化による負担軽減が目的です。よろしくお願いいたします。

「ＯＢ会創設のころ」会長を退任するに当たって

４期（昭和４０年卒）小原　佑一

仙台を離れ、首都圏にいるワンゲルＯＢ有志数人が時々集まってだべったり、山行を計画したりしていた集りがＯＢ会という形でまとまり、毎年１月末に新年会を開催するようにまでなった。新年会が終わってすぐ新宿から夜行列車で八ヶ岳に向かったこともあった。

仕事の都合で３度ほど海外勤務で日本にいないことがあったが、ＯＢ会はなんの支障もなく続いていた。

コロナ禍以前はなんとか山を歩こうという気があったが、最近は体力の衰えには勝てず、散歩に毛が生えた程度で誤魔化している始末です。

ＯＢ会の会長とは名ばかりで、新年会の時に拙い乾杯の音頭をとるくらいしかやってこなかった。本当にいい加減な会長でした。

皆様、長い間ありがとうございました。

「会の継続をずっと」会長を引き受けるに当たって

８期（昭和４４年卒）佐藤　拓哉

「会長を引き受けるに当たっての抱負」というのは私にとって馴染まない言葉である。「長年にわたって切り盛りしてきたＯＢ会の運営を後輩に託す」というのが偽りのない心境である。そのため、会長になっての抱負は特にない。その代わり、これまでを振り返ることによって、これからもずっとＯＢ会を継続していって欲しいという思いを表したい。

【現在のＯＢ会の発足】

現在の形のＯＢ会が発足したのは、私が卒業してから６年経った1975年である。会長が小原さん（４期）、副会長が佐藤（８期）、事務局が水上さん（８期）、菅原さん（10期）で発足した。その後、会計、ホームページ、メールアドレス管理などを担ってくれたかたもおり、今の形になった。

【ＯＢ山行】

最初の頃は年１回または２回、ＯＢ会主催の山行を企画していた。第１回は平ケ岳で12人が参加したが、次第に消えていった。圧巻は、谷川岳の蓬峠に集まった時で、家族連れが多く、幼稚園の遠足のようであった。何人もの小さい子が、土合までよく歩いたものである。

【会費】

年1000円の会費徴収と管理は大変であった。10年分振り込んでくれた人もいたが、大半の方からは振り込みがなかった。新年会に集まった方から集めたこともあったが、割り切れないものがあった。会報がホームページ掲載となってからは印刷、送付費用がかからなくなり、葬祭費も廃止して出費がほとんどなくなったのを機に、会費徴収を止めた。

【新年会】
当初は幹事を各代の持ち回りにしていたので、開催日や場所の連絡が大変であった。事務局でやるようにし、開催日を固定し、場所も新橋亭とした。なぜ、今でも新橋亭なのか？　昔は土曜日の夜に行なっていたが、週休二日制が定着した途端、わざわざ休日に東京に出てくる人がいなくなった。そんな折、30か40人くらいで予約していたのに、12人しか集まらなかった。支配人が、「キャンセル料は要りません。来年は人数確認をお願いします」と言ってくれた。この一件があったから、今でも新橋亭である。
【会報】
会報は何故か４号から始まっている。小原さんの話では、３回ほど作ったとのことであった。それならば、ということで最初に作った会報を４号とした。最初の頃は手書きであり、会社に入っている印刷会社にオフセット印刷してもらい、手書きの宛名の封書で郵送していた。ガリ版印刷で作ったこともあった。オギャー（編注：佐藤さんのパートナーの愛称）と二人で内職しているような感じであった。今はパソコン、メール、ホームページ掲載……楽になった。
【ホームページ】
西川さん（22期）がホームページを作ってくれた。画期的な出来事であった。そのお陰で会報も郵送せずに済むようになった。現在は相原さん（８期）が管理してくれている。
【50周年、60周年記念行事】
ＴＵＷＶの50周年及び60周年記念行事を仙台で行なった。ただし、これはＯＢ会の直接的な開催ではなかった。実行委員会を立ち上げて開催した。50周年が後藤さん（３期）、60周年が櫻さん（５期）に実行委員長をしていただいた。在仙の方々には多くの協力をいただいた。2028年には70周年となるが、それはまだ先なのか、もうすぐなのか？
実は、ＯＢ会には未だに会則がないのである。会則がないので役員の任期も決まっていない。そのため５０年近くもＯＢ会を切り盛りしてきた。ある意味、幸せであった。

「協力は惜しみません」副会長を引き受けるに当たって

１２期（昭和４８年卒）神山　文範

２０２４年１月、久しぶりの新橋亭のOB会新年会の最若手のテーブルに座って伊田さんたちと楽しんでいたところに、小原前OB会長と佐藤（拓哉）前副会長がいらっしゃって、「僕たちは今回で辞めるから、若手で会長、副会長を頼む」と言われました。
びっくりして、僕は「この中で新会長ができるのは拓哉さんを措いて他にいませんよ。拓哉さんが会長をされるなら、僕は協力を惜しみません」とか発言した記憶があります。同じテーブルの若手（といっても、伊田さんは２６期ですが、あとは１０期から１４期くらいまでのおじいさんOB）の皆さんが頷くのを見て、小原さんと拓哉さんは相談されて……結局、拓哉会長・神山副会長・伊田事務局長（編注：幹事）ということになってしまったのです。後に３人で会って、拓哉さんからOB会の現状や役員の業務などの説明を受けて、神山は会計と新年会担当、伊田さんは会報と連絡（メールアドレス管理）担当、さらにTUWVのHPの管理・実務は拓哉会長から今まで通り相原さんにお願いするということになりました。
というわけで、小生が副会長になりました。山登りを続けていますが（横浜の釜利谷の我が家から横浜市最高峰大丸山１５６．８mに約３０分。その辺りから鎌倉への裏山を週２～３回彷徨していますし、今年の夏は山口耀久の『北八ツ彷徨』に触発されて、２泊３日で北横岳から蓼科山を歩き、北横岳ヒュッテと、後で知ったのですが三日月先輩が働いておられた蓼科山頂ヒュッテに宿泊)、OB会関係は新橋亭の新年会出席以外は、同期会（１２期）の幹事、創部５０周年の記念祝賀会の出席と創部６０周年の記念祝賀会の幹事の一人として講演会を担当した程度の経験しかありません。会計と新年会の担当に加えて、会長を補佐し、また若手の伊田事務局長と協力して、この会の行事に若手OBの方の姿を増やしていきたいと思っています。皆様、どうぞよろしくお願い致します。まずは、皆様の１月２５日（土）の新橋亭のOB会新年会へのご出席をお願致します。
最後になりましたが、小原前会長には長い間OB会を牽引していただき誠にありがとうございました。今のOB会があるのは、小原前会長と、副会長・新年会の幹事とともに現役へのロープワーク指導や用具の寄付を主導されてこられた拓哉新会長のお陰です。ご両名に心から感謝申し上げますとともに、ご

両名と皆様のご指導・ご鞭撻をお願い申し上げまして、副会長就任のご挨拶といたしたいと思います。

「ご縁を大切に」 幹事を引き受けるに当たって

２６期（昭和６２年卒）伊田浩之

お世話になった人たちとのご縁を大切にしています。高校卓球部のＯＢＯＧ会の世話を 30 年近く続けていますし、所属している俳句結社の公式サイトの管理も長くなりました。１９９８年に愛媛新聞社を辞めて、東京の週刊誌に転職してからは、ＴＵＷＶのＯＢ・ＯＧ会にもできるだけ顔を出しています。５０年の周年行事を提案したのはわたしです。わたしが最年少の新年会もけっこうありましたので、実務の一部（メールアドレスの管理と会報作成）を担うことに否（いな）はありませんでした。

３０年以上に及ぶ日本経済の停滞で若年層に生活苦は広がっています（卓球部の新年会は飲み放題付き４０００円程度）が、新年会費が６０００円になったので、参加のハードルは下がっていると思います。若年層への参加拡大が今後の課題ですね。微力を尽くします。ご協力をお願いいたします。

活動報告と近況のご連絡（順不同）

第５期同期会　第５期　谷正實

２０２４年１０月８～９日、福島県会津若松の東山温泉で、TUWV第５期の同期会を開催いたしました。

５期の卒業生は２８人、うちすでに鬼籍に入られた方が５人、音信不通が１人、残り２２人のうち、近くは仙台から、遠くは神戸市からと12人が集まりました。

15時過ぎには宿の一部屋に集合し、鮭を飲みながら四方山話に花を咲かせ、18時からは宴会！TUWVの活動の一こまの写真をスライドプロジェクターで写し、写真の説明を写真の提供者に説明して貰いながら、「あの時はアーだった！」「イヤ、こうだった！」と

６０年前にタイムスリップして楽しいひと時を過ごしました。

９日はあいにくの雨でしたが、武家屋敷や鶴ヶ城を観光して旧交を温め、13時過ぎに来年の再会を約束してそれぞれに帰途につきました。

左の写真は、我々の１年の時の合宿の時のもの（蔵王山頂）です。当時は「ゴンスケ」をつけ、飯炊き用の鍋を背負っていた風景です。今では想像もつかないでしょう！

傘寿のもんじゃ屋形船そして深川　７期　（昭和 43 年卒）　大釜寛修

我ら７期生が有志により、２０２０年６月から毎月１回のオンライン会合を催していることは既報の通りである。然し乍ら、現実に会う喜びはオンラインの比にあらず、２０２１年南三陸、２０２２年横浜でリアル同期会を行った。２０２４年１月に大山幸則君と石川誠之君が鬼籍に入り、昨年にはリアル同期会が催されなかったことが悔やまれた。会えるうちに会おう！

ある日、在仙組から「もんじゃ焼きなるものを食してみたい」「７年前の屋形船同期会は楽しかったな～」という呟きが脅迫に聞こえ、今年は東京でリアル同期会を開催すると決定した。テーマはもんじゃ焼きと屋形船そして深川。時期は７月下旬。同期会の準備に取り掛かった処で、会える時を待たず、５月に藤森英和君が急逝した。何とも残念なことであった。

２０２４年７月２５日午前１１時、都営地下鉄大江戸線勝どき駅集合。の筈が 10 時半には全員勢揃い。年寄りはせっかち。ではなく、早く皆に会いたい一心の現れであろう。参加者は、菊谷、國岡、高橋（直）、手戸、真尾、村山、矢後、大釜夫妻の９人。会費を徴収していざ船着き場・勝どき朝潮桟橋へ。勝どき・晴海一帯の再開発タワーマンション群に見とれ、マンションの谷間の日陰で船を待つ間のプレ同期会。

船は小さな乗合屋形船スカイデッキ付。同期会は、船が出発してすぐに、今年亡くなった３人の御霊に献杯して開会。早速もんじゃ焼き。慣れない手つきでも上手に焼き放題、食べ放題。時々飲み放題。船は朝潮運河から永代橋の手前で隅田川に入り、清洲橋、両国橋、吾妻橋から言問橋の先まで遡り、暫し停船。スカイデッキに出て東京スカイツリーを眺めたり写真を撮ったり。

桟橋への帰路も、隅田川ガイドの巧妙な説明を聴きながらもんじゃ焼き。永代橋から更に下って佃大橋、勝どき橋、築地大橋をくぐって晴海ふ頭を見ながら朝潮運河に入って船着き場到着。

暑い最中ではあったが、もんじゃ焼きも屋形船も隅田川橋梁群も堪能できた。会えるうちに会おう！の同期会第１部であった。

ここで矢後と大釜夫妻が帰路につき、残ったメンバーは地下鉄で門前仲町へ。同期会第２部の深川である。先ずは成田山深川不動尊にお参り。続いて富岡八幡宮にお参り。これで亡くなった３人の供養を済ませたつもり。更に、健康長寿の祈願も万全。そして着いた所は予約していた深川そば処。冷房の効いたお店で旨いお酒を酌み交わし、旧交を存分に温め、最後にお蕎麦で閉めた。夜も更けていた。

６１期卒業旅行 in 奄美大島　61 期（令和 4 年卒）柳田翔平

大学院の修士課程の修了に伴い、２０２４年３月１９～２０日、卒業旅行を決行。企業へ就職し離仙する者（飯田・中村・原田）、博士課程へ進学し在仙を続ける者（髙橋・柳田）に２分され、それぞれの門出を祝う場となった。

お世話になった宿泊施設にて

カヤックを満喫

マングローブ原生林にて

ヤドリ浜にて

鶏飯、天然記念物アマミノクロウサギの剥製、マングローブ林でのカヤック、ホエールウォッチングなど奄美のご飯や貴重な生物の鑑賞、アクティビティを楽しんだ。寿命を全うした際、この中の写真が使われれば幸いである。

〈山行記録 2024〉

・２０２４年７月６日（土）：大行沢（61 期：髙橋・柳田、62 期：若山）*

後に掲載されている知床での海岸トレッキングに向けた沢登り。ザックを背負いながら泳ぐ練習やロープワークの確認がメインであった。

在仙OB会の開催報告　29 期　田原誠

新型コロナ感染症の拡大に伴い開催を自粛後なかなか再開できていなかった在仙ＯＢＯＧ会を、今年度久し振りに開催することができました。日時は２０２４（令和６）年７月２３日（火）19:00 ～ 21:00、場所は稲荷小路の「中国美点菜『彩華』」の３階で以下の１６人が参加下さいました。

（５期）瀬尾勝之さん
（７期）国岡徹郎さん、手戸雅巳さん
（８期）守護嘉朗さん、宮下美恵子さん
（16 期）植松康さん（元部長）
（31 期）川俣奬さん
（35 期）長澤淳彦さん（現部長）
（38 期）安中さやかさん（現副部長）

（51 期）御子柴駿さん
（61 期）高橋尚央さん、柳田翔平さん
（62 期）内山育哉さん、福田幹久さん、若山泰成さん
（63 期）安生温大さん

参加者一覧を見て頂いておわかりの通り、幹事の田原は前日に何とコロナウイルス陽性が判明してしまったため、急遽６１期の柳田さん（元主将）に当日の仕切りを無茶振りし、快く引き受けて頂けたため無事開催することができました（柳田さん、感謝します！）。

当日は元部長の植松先生の乾杯にはじまり、それぞれの近況報告と山談義に花が咲き、最後は現部長の長澤先生に締めて頂きました。配布資料には現役部員の一覧表や夏合宿のパーティ構成等も記載し現役と在仙ＯＢＯＧの橋渡しもできたのではないかと思います。

やはりこのような会を年１回は開催すべきと改めて感じ、ここ数年参加できないまま離仙された方には改めて申し訳なかったのですが、まだまだお声掛けできていない在仙 OB の方も多数いらっしゃいますので少しずつでも広げていきたいと考えております。（この報告を見られた在仙の方や在仙の同期をご存じの方は田原までご一報頂けると幸いです）

最後に、参加者の方より、学生歌と部歌の歌詞を載せて欲しかった！という声があったとお聞きし、確かに！と反省した次第ですので、次は掲載したいと思います。

津軽の生活が６年目になりました　２２期（昭和５８年卒）　利根川敏

青森県つがる市に単身赴任し、６回目の冬をむかえるところです。近況報告をします。

冬の寒さが厳しい津軽の生活も６年目に入ると、季節に応じた生活の変化を十分楽しむ余裕が出るものです。住めば都とは良く言ったもので、通勤は車で５分、四季の食材（野菜、魚、果物）も豊かなど、環境は都会と地方のギャップを埋めてくれるため、自然が好きでＴＵＷＶに入った私には、もう都会に戻りたくない……といった気持ちになります。

一方で、狭い社会で生活していますので、多くの方々が互いの生活の様子（職場や家族構成など）を熟知しているため、最近では自宅に届く宅急便も（単身赴任のため日中は不在）、不在票を残さず、職場まで配達してくれる方もいるくらいです。

冬が厳しいため、春をむかえる喜びは大きく、弘前城の満開の桜をあと何回こちらで見る事ができるのか……７０歳まで単身生活が続くと、残り５回かな……などと考えています。

津軽を代表する山「岩木山（標高１６２５ｍ)」の夏の写真を紹介します。ねぷたも終わり８月後半に撮影しました。秋になると稲穂が黄金色に輝き、冬には白銀の津軽富士に変ります。
津軽方面（つがる市森田町）にいらっしゃる機会がありましたら、ぜひご一報下さい。

８、９期合同山行　第２２回　吾妻浄土平・土湯温泉

８期（昭和 44 年卒）三原健治

参加者：１０人　８期　小笠原、守護、根岸、前田夫妻、三日月、宮下、三原（８人）
　　９期　石野、原田（２人）
日時：２０２４年９月８日（日）～９月９日（月）
宿泊場所：新野地温泉, 秘湯の宿「赤湯好山荘」
コース：１日目　ＪＲ福島駅西口（電車組ピックアップ）→兎平駐車場集合（車組、福島駅ピックアップ組と合流)、浄土平・吾妻小富士・釜沼　周辺散策・一切経往復（健脚組）→兎平集合→赤湯好山荘（宿泊）
　　２日目　赤湯好山荘→土湯の女沼、仁田沼のブナ林散策、仁田沼駐車場にて解散

９月８日（日)、関東地方はこの日最高気温が３０度を超える真夏日との予報。浄土平の天気予報は曇り時々雨。福島駅で三日月さんに電車組（宮下さん、三原）をピックアップしてもらう。福島駅から兎平駐車場に向かう途中、吾妻小富士が雲の合間から見え、天気は持ちそう。兎平駐車場に 10：30 頃福島ピックアップ組到着。既に小笠原さん、根岸さん、守護さんらが既に到着していた。
浄土平は曇り。雨は降っておらず気温 24 ℃と、歩くのに丁度よい天候。兎平からは浄土平、東小富士、鎌沼、一切経等を幾組かに別れて散策と昼食。
小笠原さん、宮下さん、私は鎌沼（左上写真）へ。ムラサキリンドウが道のところどころに咲いて夏の終わりを告げていた。鎌沼は散策する人も少なく、静かな沼で小雨に濡れて沼の周りを歩くのに気持ちの良い所でした。鎌沼をぐるりと回って一切経への登り道と交差する近くで元気よく降りてくる三日月さんに合う。一切経往復をしたのは彼一人でした。
午後２時過ぎに参加者１０人が散策を終えて兎平駐車場にそろい、今宵の宿泊、新野地温泉，秘湯の宿「赤湯好山荘」に向かう。

好山荘の前にて　玄関右側にある狸の瀬戸物は、震災でも壊れずに残ったもの

「赤湯好山荘」は２０２１年２月の福島県沖地震で建物全壊、本日泊まるのは２０２１年７月に再開した新築３年の建物。山小屋風の作りで女性に人気の落ちついた宿。現在は５部屋で運営中。今晩の宿泊客はわれわれだけで、貸し切り状態だった。

ここでは露天風呂（硫黄泉、白湯）と内風呂（炭酸鉄泉、白湯）の２種類の源泉を楽しめるとのこと。夜になると露天風呂には熊が出るとの事でまずは露天風呂で汗を流す。

それからはいつものコース、食前酒、談笑、夕食、２次会。２次会では小笠原さんからブラジルの土産話を聞く。

９月９日（月）　天候は霧、雨は無く涼しく気持ちよい朝を迎えた。「赤湯好山荘」の玄関前で記念撮影（写真上）し、土湯温泉に向かう。

土湯温泉の仁田沼駐車場に車を置いて、霧の中を女沼に降りる。女沼からは整備された遊歩道（一部階段）を歩く。女沼に沿って３０分ほど歩き、そこからやや急な坂道を登り、「思いの滝」が見える、滝見台ベンチへ。ブナの原生林と杉の林に囲まれた遊歩道を歩き仁田沼へ。遊歩道の案内板には「マイナスイオンいっぱいの森林浴が体験できる」と書かれていた。

ブナの原生林の中を歩く

仁田沼での休憩

仁田沼は「沼」というよりは「湿原」、ここで休憩後、仁田沼駐車場に降りる（写真上）。他のパーティには誰にも会わず、霧の中を約２時間の静かな散策を楽しみました。また来年皆元気で集まれる事を祈念して、午前１１時に仁田沼駐車場にて解散。

今回の参加者は１０人とこれまでになく少なくなった。これは本人および家族の事情でやむを得ないと思う。私自身は今回なんとか皆について行くのがせいいっぱいで、体力の衰えを感じさせられました。来年も参加できるように体調管理・維持に十分に注意しようと決意を新たにしました。

幹事の石野さんには大変お世話になりました。有り難うございます。

ロシア・クルスク州－素朴で、優しい人たち－

１１期（昭和４７年卒）鈴木元昭

２０２４年８月６日、ウクライナ軍が、ロシアのクルスク州に侵攻しました。ウクライナ軍は前進を続け、１００カ所の集落と１３０００平方キロを制圧したとされています。

私はクルスク州に行ったことがあります。

パイプラインを建造するための鋼管の研究開発を行なっていた時代でした。当時はソ連でした。ソ連では、パイプラインの建設が盛んで、ソ連の研究開発機関と交流を行っていました。その時代、ロシアに何回か出張しました。

出張はモスクワが多かったのですが、1 回だけ、パイプラインの建設現場に行ったことがあります。その現場がクルスクでした。１９８８年のことでした。

建設現場には、モスクワから夜行列車で向かいました。当時、「ソ連」時代で警備が厳しく、列車から外を眺めることができないように夜の移動になったと言われました。

夜にモスクワを出て、朝にクルスクに着きました。パイプライン建設現場は駅から遠く離れた原野にありました。そこで働くクルスク人と会うことが出来ました。

モスクワ人と、はっきり違っていました。モスクワの抑圧された「暗さ」はなく、クルスクの人たちは、開放的で明るい人たちでした。

夕方に歓迎のパーティを開いてくれました。ペレストロイカで酒類の販売が制限されていた時代でした。そこに出てきたのは、「手作りのビール」でした。藁が混じり、濁ったビールで、未殺菌と思われました。飲むのを躊躇しましたが、気持ちがうれしく、ありがたくいただきました。独特の味がしました。当時、ウオッカは、まったく店にありませんでした。しかしながら、「ベリョースカ」という外国人専用のショップがあり、そこにはたくさんウオッカがありました。外貨を持っていれば買うことができたのです。私たちは、モスクワの「ベリョースカ」でウオッカを何本か買い、パーティに持ち込みました。クルスクの人たちはとても喜びました。

クルスク流のパーティが始まりました。ウオッカをグラスに注ぎ、各人が、「世界に平和を！」などとひと言叫んで、グラスを飲み干します。それを全員がやるのです。２０人ほどいたと思います。当然、当方は、急性アルコール摂取状態になり、あっという間に酔いつぶれました。

翌日はひどい二日酔い状態でした。それを見たクルスクの人たちは、すっかり友達あつかいしてくれて、ハグをする仲間になっていました。

友情の印に贈り物をいただきました。右上の写真の「錫（すず）の盃」がそれです。クルスクの人たちは、とても素朴で暖かい心をもった人たちでした。ウクライナ人とよく似ていました。

そんなクルスクの人たちが、戦争に巻き込まれています。ロシアの指導層の罪は、平和を愛する素朴な自国民にまで及んでいます。

11期・同期会－8年ぶりに、東京で開催しました－

11 期（昭和 47 年卒）鈴木元昭

乗鞍高原に集まってから、８年が過ぎてしまいました。いろんなことがあって開催できなかった同期会。ようやく２０２４年に開催することができました。

各地から日帰りが可能な場所を選びました。２０２４年５月２８日・正午前、東京駅・丸の内北口に集合。歩いて５分の東京會舘に行きました。

西は、坂出、明石、奈良から、北は、秋田、水戸から、中央は松本から２人。それに首都圏３人の計１０人が集まりました。真鍋、竹内、仁藤、野口、園部、柴田、横川、秋田、鈴木芳、鈴木元の面々です。

集まってから１時間、ランチを楽しみながら歓談。そして、各自から、近況報告。
前回の乗鞍集合から８年。やっぱり、いろんなことが各自の人生にあったことがわかりました。近況報告は、約１時間４０分に及びました。濃い時間でした。

半数が、後期高齢者になりました。だんだんと動けなくなる時間が迫ってきています。日帰りが体力的に厳しい歳になっています。それでも、来年も、同じ時期に、ここに集まることを誓いました。

ダイビングとゴルフ三昧　１０期　田中康則

今年は、正月、ゴールデンウイーク、夏休みとダイビング三昧でした。石垣島、西表島そしてフィリピンのセブ島。年齢を考え、そろそろ引退しようと思っています。

ゴルフは、日本女子オープン、富士通レディース、樋口久子三菱電機レディースを観戦、川崎春香選手のサインをもらいました。又カレドニアンや茨木ゴルフ倶楽部などでのコンペに参加、それなりに楽しい１年となりました。

10月、茨木ゴルフ倶楽部にて。

美ヶ原ハイキング　６期　加藤邦明

昨年霧ヶ峰に行ったので本年は美ヶ原に行こうで、１０月に鼻汁・発汗の風邪気味状態なれど家族と自家用車で出かけた。中央高速道の岡谷インターから出るが、旧和田峠トンネルが通行止めのため、新和田峠トンネルを通り、和田宿本陣前（道の駅和田宿）経由で山本小屋ふるさと館に到着した。

靴を履き替えて１０時発、脇を通るホテルの送迎バスの通行に遠慮しながら牧場内の砂利道を歩み、山頂の王ヶ頭ホテルには１１時１５分に着いた。

天候は良好なれど風がやや冷たいので王ヶ鼻に行くのはパスして、１１時３０分には退散した。両脇に乳牛の顔を見ながら山本小屋には１２時３０分に戻った。歩測計の数字は１万３３８７７歩であった。

昨年（２０２４年)、日本百名山を完登しました　第22期　金子精司

大学（TUWV）卒業後も、勤務先の山のクラブに所属し、週末登山家として細く長く登山をしておりました。昨年勤務先を退職した時点で、百名山で登った山は８９座だったのですが、昨年南ア４座、今年７月に北海道７座に登ることができ、百名山を完登することができました。（写真は、幌尻岳に第２２期石川勤氏と登った時のもの)

これからも体力の許す限り、山と付き合っていきたいと思っております。

多くの人に伝えるクライミング　８期（昭和４４年卒）佐藤　拓哉

２０２４年１２月７日、８日の２日間、伊豆の城ケ崎海岸でクラッククライミング＆忘年会を行なった。男性７人、女性９人が、東京、千葉、埼玉、神奈川、静岡、三重、大阪から集まった。集合写真を見て、その人数の多さに改めて驚き、喜びを覚えた。

５４歳でクライミングを始めて間もなく２５年を迎える。最初の１０数年は、もっぱらオギャー（編注、拓哉さんのパートナー）と２人で追浜の鷹取山や湯河原・幕岩、城ケ崎などで技術を磨き、谷川岳・一の倉沢や幽ノ沢の岩壁、北アルプスの錫杖岳・前衛壁、北穂高岳・滝谷ドーム、黒部の丸山東壁、八ヶ岳・大同心＆小同心などの大岩壁を登った。冬には八ヶ岳や南アルプス、西上州の氷瀑を渡り歩いて登った。シャモニー（フランス）やドロミテ（イタリヤ)、エルチョロ（スペイン）など海外の岩壁も登った。オギャーを守らなければという思いもあって、何度かガイド養成コースのレスキュー講習を

16人も集まった忘年クライミング

受講し、その技術をオギャーにも伝えた。本当によきザイルパートナーであった。

オギャーが病気で登れなくなってからは、新たなパートナーを育てながら多くの大岩壁を登り、「日本のクラシックルート」のビデオも２５本制作することができた。同時に、子どもを含め、いろいろな人にクライミングを教え、いくつかの山岳会の人達にレスキュー技術を教えてきた。状況を大きく変えたのは、昨年のＯＢ会報でも紹介した女性の大キレット・長谷川ピークでの滑落死亡事故であった。プライベートに一生懸命育ててきた女性の事故は衝撃的なものであった。彼女が生前、城ケ崎に女性２人を連れてきたことがあった。何故連れてきたのかは聞いていないが、その女性２人も育てて欲しかったのだろうと思い、それを無言の遺言としてその２人に連絡を取った。

それ以来、その２人に留まらず、岩場や氷瀑で知り合った人、誘ってきた友達など雪ダルマ的に人数が増えてきて、今では女性が１５人程度、男性が１０人程度の一大グループに膨れ上がった。クラッククライミングを覚えたい人、アイスクライミングのレベルアップを図りたい人、レスキューを覚えたい人など様々である。８割くらいは山岳会に所属しており、現在９つの山岳会の人が来ており、中には山岳会の中心メンバーもいる。定期的に行っている三つ峠でのレスキュー＆ロープワーク講習会には１０人が集まった。

三つ峠・屏風岩におけるレスキュー講習

７８歳も半ばを過ぎ、８０歳も手が届きそうになってきた。２０２３年 7 月に岩場で転倒して痛めた左腕が完治しないこともあるが、年齢からくる登攀能力の衰えを痛感している。悔しいが、それが現実である。しかし、幸いなことにそれに反比例するように教える能力がレベルアップしているように思える。

最近の喜びは、城ケ崎でクラックを登ったことのない初心者を、初級ルートとは言え、一日でリードクライミングできるようにすることである。これまでに数人成功している。

リードとは、自分でクラックにカムという道具をセットしてロープをクリップし、落ちてもそこで止まるようにしながら登るものである。私とオギャーは、リードできるようになるまで数年かかった。ガイド講習でも、リードできるようになるまで何年かかかるのが普通である。登る前に、カムのセットの仕方を教えるという逆転の発想の結果である。また、「落ちないように登る」のではなく、「落ちても大事にならないように登る」というように教えているのも発想の転換であり、功を奏している。

最も大事にしているのが、ロープワークとレスキュー技術のレベルアップである。これらによってマルチピッチの登攀がスムーズになり、時間短縮を図ることができ、万一のトラブルや事故にも対応できるようになる。これまでの講習会は大小合わせると７０回以上に及ぶ。

これら全てを無料で行なっている。無料とは言え、内容はガイド講習や山岳会の講習をはるかに凌ぐものであり、だからこそみんなの喜びに繋がっている。みんなの喜びがそのまま私自身の喜びになっている。オギャーと二人で研鑽したクライミング技術や経験を、この歳になっても多くの人に伝えることができるのはこの上ない幸せである。

念願の知床岬へ　61 期（令和 4 年卒）柳田翔平

2024 年 8 月 16 日～19 日

メンバー：61 期（髙橋・柳田）、62 期（若山）

ＴＵＷＶ現役時代に志した知床岬の踏破。学部２年時（２０１９年）に夏合宿を企画し実行するも天候不良と準備不足が重なり敗退。翌年以降は、コロナ禍での活動制限により再挑戦の機会を失った。現役を引退した後も、消化不良の状態が続いていた。大学院での研究生活にも慣れた頃、雪辱を果たすべく１９年当時の一部メンバーと再挑戦を決意し、今夏の実行に至った。

１９年当時は、藪漕ぎで知床半島の中央尾根を縦走して岬を目指す計画であったが、現役を引退して体力と気力が衰える今、４０ kg 近い荷物を背負って藪漕ぎをする気にはならず。早々に藪漕ぎでは

知床半島先端部の概念図

なく、比較的情報の多い海岸トレッキングで知床岬を目指す計画にした。海岸トレッキングは決して楽ではなく、ヒグマや巨岩帯、足裏が痛くなる石浜、干潮時のみ通行可のトッカリ瀬・剣岩、１５kg 程度の荷物を背負ってのへつり、落差 １００ｍの昇降といった困難が次々と降りかかる。実際、海岸トレッキング後の数日は、体に負ったダメージにより普通に歩けなかった。知床半島先端部は日本有数の危険地帯なため、山行やロープワーク等の経験値の他、十分な体力が必要な場所だった。

アプローチを含めた日程とおおまかなルートは次の通りである。

・８月１３日（火）仙台港発（太平洋フェリー）→
・８月１４日（水）苫小牧港着→新千歳空港発（ANA）→女満別空港 着→網走駅で野宿
・８月１５日（木）網走駅発（JR）→知床斜里駅着→羅臼町→相泊で野宿
・８月１６日（金）相泊から海岸トレッキング開始→近藤ヶ淵の手前で野宿
・８月１７日（土）近藤ヶ淵→知床岬→滝ノ下で野宿
・８月１８日（日）滝ノ下→近藤ヶ淵にて時化による停滞→メガネ岩の手前で野宿
・８月１９日（月）メガネ岩→相泊まで帰還→羅臼町にて宿泊
・８月２０日（火）羅臼町にて解散

知床岬にて記念撮影。（左から若山、柳田、高橋）

ＴＵＷＶ現役時代では、２回の夏合宿（１８年、１９年）がエスケープに終わったこともあり、最長でも２泊３日の山行しか経験していない。今回、現役の時よりも長期の野宿を経験したことはなんとも皮肉であるが、これでワンゲル部出身として胸を張れる気がする。

知床半島はその険しい地形も相まって天候が変わりやすい。晴れたり、暴風が吹いたり、雨が降ったり。運良く、岬に到達した際には晴天に恵まれた。岬の台地は草原地帯になっており、荘厳な雰囲気に包まれていた。岬までの道のりは険しく大変だったが、念願の岬に到達できたことは嬉しかった。岬で撮影した写真に写る満面の笑みが物語っている。知床岬の他には、崖を登った先に見えたモイレウシ湾の美しさが印象深い。まさに、「困難を乗り越えた者にしか見えない景色」であった。岬からの帰路、へつりの難所である近藤ヶ淵にて荒波に飲まれる凄絶な経験をしたが、安全への備えとこれまでの経験もあり無事に生還。特に、同行してくれた２人には感謝したい。また今回、ヒグマを一切見かけなかった。 実際、今年の知床半島先端部ではヒグマの目撃件数が減っていた模様。総じて、強運に恵まれていた。

（※詳細な記録は Web 上に別途掲載予定です。）

美しきモイレウシ湾

近藤ヶ淵手前で疲れ切ったメンバー

知床岬から見えるオホーツク

ブルーグラス同好会とＴＵＷＶの意外な関係　２６期　伊田浩之

音楽サークル「ブルーグラス同好会」を大学３年生の時に立ち上げた。ブルーグラスとは、バンジョーやギター、マンドリン、バイオリン、ウッドベースなどのアコースティック楽器と歌のアンサンブルが特徴的な米国発祥の音楽。高校生時代から憧れていたが、東北大学にサークルがなかったので、一度

はあきらめた。だが、思いは断ちがたく、大学２年生からメンバーを集め、バンド活動をしていた。
　大学３年の時に、教養部のサークル協議会に加入して部室を獲得できる見込みがたった。当時のサークル協議会は中核派が把握していて、もっとも警戒していたのは新サークルが統一教会系のダミー団体ではないかどうか。そこをクリアして、次の課題がサークルメンバーの数だ。当時、私はすでに学部生。そこで、ＴＵＷＶの１、２年生に名前を借りまくった。
　ブルーグラス同好会はいまでは学友会文化部の準加盟団体で、部員数８０人超。今年で、創部４０年を迎えます。２７期、２８期のみなさん、ほんとうにありがとう。

夏の常念岳・蝶ヶ岳テント泊縦走、ツキノワグマに至近で遭遇のアクシデントも　２２期　手塚和彦

目的地：常念岳・蝶ヶ岳
日程：２０２４年８月１０日～１２日
メンバー：手塚和彦（ＰＬ、22 期）、石川勤（22 期）、千田敏之（21 期）＋１
　私は安曇野（旧南安曇郡豊科町）で生まれ、大学進学で仙台に移り住むまではほぼ毎日常念岳を見て育った。幼い頃はあの山の向こうには海が見えるに違いないと思っていて、中学の集団登山で燕岳に登ったとき、その向こうにあるのはさらに高い山並みだと知ってちょっとがっかりした。しかし、その山並みの雄大さと雲海に広がる朝焼けの感動が忘れられず、大学では TUWV に入部することにした。

常念岳山頂（背景は穂高連峰、８／１１）

　実家の墓も西に向かって常念岳と対峙している。墓参りに行くたびに自分の灰は常念岳に撒いて欲しいと思うのだが、それはできないようである。そんな常念岳に毎年山行を共にしている千田、石川の両名は行ったことがないというので、２０２４年の夏合宿にここを選んだ。
　前日に山梨・甲斐大泉の手塚邸で前夜祭をやって、翌朝４時半に出発。三俣登山口に６時前に着いたものの、１８０台収容の三俣第１・第２駐車場はほぼ満車。なんとかスペースを見つけて一安心。山の日を含む連休なので入山者が多いことは予想していたが、数週間前の豪雨で一ノ沢登山口が土砂崩れで閉鎖になったことも影響したのであろう。早速、常念岳のテン場の混み具合が心配になった。
　このパーティーはこれまで黒部源流の沢登りや読売新道など、あまり人が入らない玄人好みのコースを選んでいたので、ベタなコースを嘗めてかかっていたところがあり、常念岳の登りには大変苦しんだ。特に前常念に至る大岩が連続するガレ場では思うように足が上がらずペースが落ちた。登りっぱなしの７時間は辛いものがあった。前常念を少し過ぎたところにトラバース道の立て看板があり「上級者コースです。コースタイムは短縮になりません。」と書かれているものの、もう上りたくないとの思いから迷わずトラバースを選択し、少々怖い思いをした。眺望もそれほどでもない修行のような登りであった。

蝶ヶ岳ヒュッテのテン場（正面は常念岳、8/11）

　途中、樹林帯でクマに遭遇したことは話のタネである。先頭を歩いていた一人が突然「何かいる！」と叫んだ。と次の瞬間、正面の藪の中からツキノワグマが飛び出して来た。クマもびっくりしたのかその目はとても焦った表情で、猛スピードで我々の間を駆け抜け沢筋に消えていった。石川のウォーキングポールにぶつかったそうである。我々もこれまで幾度か山でクマに遭遇しているが、1 メートル以内は最短記録である。最近、登山用品店では「クマ避けスプレー」なるものが売られているが、「あれじゃ、スプレーを取り出している暇はないな」「大人のクマでなくてよかった（子グマより少し大きい青年グマだった）」などと皆でクマ対策について話し合った。

蝶ヶ岳の朝、モルゲンロートに映える穂高連峰と槍ヶ岳（８／１２）。

初日に到着した常念小屋のテン場は定数の２倍を超えそうな数のテントで埋め尽くされていた。もう区画も何もあったものではない。なんとか２張りのスペースを見つけてビールで乾杯。翌朝は晴れ。雲海から昇る朝日に槍ヶ岳が照らされる。常念岳から蝶が岳への道は常に右手に槍穂の稜線を望む。大キレットの落ち込みがダイナミックだ。振り返ると三俣蓮華まで見通せる。

約６時間の縦走を経ての２泊目の蝶ヶ岳ヒュッテもテントであふれていた。テント泊入門の山として人気があるようで、多様な登山者。山に行ってみようかしら……みたいな女性に豆から挽いたドリップコーヒーをふるまう男もいれば、女性のソロも多い。蝶ヶ岳の朝は常念岳よりも更に神々しい。雲海の下には松本平。モルゲンロートに映える穂高連峰の山肌には、蝶ヶ岳のシルエットが映る。

たまにはこんな山行もいい。リスクの少ない稜線を歩き、テント場でゆっくりビールを飲む。そんな山行は、とうに還暦を過ぎたパーティーには丁度いいのかもしれない。下山後は長野・原村の岩屋邸に寄り、極上のジンギスカンを食しながら反省会を行なった。

小浅間山　８期（昭和 44 年卒）相原敬

浅間連山は群馬長野の両県にまたがり、更に稜線を北上すると志賀や谷川連峰に繋がっている。

車坂峠、地蔵峠を挟んで十指に余る名峰が連なっていて、しかも両峠にはスキー場が整備されているので、積雪期でも心配なくアクセスや駐車には圧倒的に優位である。

浅間連山の北側が群馬県で南側が長野県になっているのも、意外に戸惑う事実である。

高崎から近いから季節を問わずよく通っているエリアであるが、その話は一旦ここに置いといて。

噴煙を上げる浅間山本峰の東にある小浅間山という寄生火山にも、冬季限定で訪れることが多い。

標高１６５５ｍ 登山口の峰の茶屋から往復４㎞　標高差２５０ ｍ という小さな山であるが、喜寿を過ぎた病院通いクスリ漬け夫婦の実力には相応な山と言える。

小浅間山取付きまでは洒落た林道歩きが好印象で、雪が凍っていなければ滑り止めもいらない。

取付きが近付くと浅間山の大斜面が左手に姿を現し、間もなく浅間山と小浅間山の鞍部に着く。

小浅間の斜面も浅間同様剥げているので、雪は付きにくくせいぜい１０㎝位だが、風の強い日が多い。

きょうはまあまあの空模様で悪くはない。小浅間には東峰と西峰があり、常に東峰から登る。雄大な雪景色の浅間山を背負って登るのは気持ち良く、晴れた時には八ツや秩父の山が望まれる。

東峰から西峰に移動する途中でランチタイムに。毎度決まったメニューながら、山ご飯はうまいね。こんなことを繰り返して、二人は歳を重ねる。じゃまた来るよ。

八十歳の手習い　7期 真尾征雄

最近視力の低下が進んでいる。新聞を読むことが難しくなった。楽譜には自分なりに工夫した書き込みをして何とかしのいでいたが、それも難しくなってきた。ボイスレコーダを頼りに歌っている。

２０２４年４月６日、８０歳の誕生日を迎えた。この日ある人の紹介で「岳・仙台句会」に参加し、なんと入会してしまった。俳句とは全く無縁の私が何故？　俳句は 17 文字からなる。これなら視力がおちても他の感覚を働かせれば何とかなるのではと考えたからである。それ以来毎月５句投句し、句会に参加している。俳句をはじめて気が付いたのだが、説明的な句になってしまうことが多い。また語彙の少なさを痛感している。プレバトに投稿したら夏井先生から「才能無し」のレッテルを押されそうだ。恥をしのいで 5 句お披露目したい。せめて「凡人」程度までは行きたいものである。

主なきデスクの上に西日射す
納棺に歳時記二冊秋の声
酸ヶ湯から初雪便り湯の香り
旗魚しゃぶホテルで孤食スマホ見つ
老いてなほ歌う歓び冬木立

訃報

２０２４年に下記のＯＢＧの方々が亡くなられました。謹んでご冥福をお祈りします。

４期　八木正昭
６期　恩田達也
７期　石川誠之　大山幸則　藤森英和
１０期　薄木三生
１４期　直江眞一

八木正昭さんの思い出　4期寄せ書き

★秋葉　晃介

ワンゲル時代、八木くんと一緒のチームで山行したことはあまりなかった（ような気がする）し、個人的にも２人で飲んだ記憶もありませんが……。その後、彼が一旦就職した会社を辞めてまた大学に戻ることになった時に、まだ仙台に残っていた私が、住まい探しの面倒をみたことがあり、それをキッカケに、２年程、２人で飲んで、山以外のことも話題にいろいろ話したことを思い出しました。　合掌！

★及川　捷悦

八木さんの訃報　突然のことでびっくりしています。数年前に　九州に旅行した折　奥様ともども　阿蘇や人吉など　ご一緒したこと　思い出します。ご冥福をお祈りします。

★小原　佑一

八木くんと言えば思い出すのは２年の時の夏合宿、南アルプス集合場所の三伏峠で山小屋の親父みたいな、仕切り屋のように歩き回っていた姿です。

★白井　洋行・美佐子

少し急ぎすぎた気がしますが、２年前に先立った愛妻順子さんに再会できたことでしょう。悲しみを堪えて、明るいエピソードで追悼します。

episode 1 （TUWV1 年生）飯豊夏合宿。食料調達担当として山形小国町の米屋で当時統制価格だった米を値切って買ってきた。大阪の堺出身と知り何となく納得。

episode 2 （TUWV2 年生）ダンスパーティー。堺商人の末裔？として部の活動資金を稼ごうと企画。宮

城や尚絅といった女子大でパー券を売りさばいて、部に貢献。ただし彼女は出来ず。

episode 3　（TUWV4 年生）　卒業を前に、わんこそばを食べに行こうということになり、まず花巻温泉の湯治宿に泊まり、翌日朝飯抜きで挑戦。記録更新はならず。

episode 4　卒業後。名古屋の我が新婚家庭をのぞき見に来られ、また大分のマイホームにも泊まってもらった。温暖な冬の大分でコートを忘れ、ホーバークラフト乗り場まで美沙子がタクシーで届けた。

episode 5　年賀状にプリントされた写真がある。木製の大型家具。ワインキャビネット、チェスト、柱時計、座卓など還暦後に始めた趣味の木工で、材料調達に東京の木場まで行くという。お土産にいただいた小物、大切にしている。（写真上）

★竹井　良夫

八木さんが亡くなられたこと、本当に寂しい限りです。教養部からの付き合いで６０年以上の友達になります。更に年が経っておたがい九州に住むこととなり、家族ぐるみの付き合いでした。残念ながら最近は私の運転が怪しなり熊本に行けなくなりましたが、以前、熊本では奥さんの順子さんと仲むつまじくしていましたので、八木さんは順子さんなしでは長生き出来なかったのだと思います。八木さんの関西弁をもう一度聞きたいです。

★野村　紘一

八木さんとは特に一緒のグループで山行を楽しみました。思い出すのは２年生の秋合宿で朝日連峰に行った時の大鳥池でのキャンプ地で、丁度イワナ釣りをしていた人がいました。八木が「おい、野村」「釣竿をかりてくるからイワナを頼む」と言われ、何匹か釣れたのを覚えています。キャンプ地で彼が焼いてくれ、おいしかったのを覚えています。多分、今まで食べたイワナでは最上級です。八木は嬉しそうによくやったなという顔をしていました。この印象が一番かな？

★平塚　征英

八木さんはワンゲル現役の頃は、山行は余り熱心ではなかったと思います。初めて一緒だったのは秋合宿の安達太良山でした。

１９９２年に仙台へ転勤した際には八木さんが大学に残っており、二人で馴染みのバーなどで楽しみました。美人ママの店にはバラの花一輪を持って行くのが常でした。八木さんはカラオケは好まず、私は隣の店のガラッパチのママさんにつられてカラオケをやるようになり、その店の方が常連になってしまいました。ピアノ演奏を売り物にするバーも紹介されました。

１年位で熊本に引っ越してしまいましたが、その後は八戸の会社への技術指導出張の際には仙台に必ず立ち寄り、後輩達とワンゲル同窓会を楽しみました。熊本名産の晩白柚や焼酎しろなどのお土産も毎回のようでした。

私が横浜に戻ってからは、八戸出張の際には東京に立ち寄り、同期の幾久会懇親会を行ないました。八木さんが来るなら参加するとの仲間もおりました。

昨年の元主将の関川さんに続いて八木さんがお亡くなりになり、幾久会も寂しくなりました。

２０２０年１月１３日　幾久会新年会（左から、敬称略）平塚・及川・野村・緑川・小原・島崎・関川・八木・秋葉。

★緑川　学

八木さんとは合宿以外一緒に山に行ったことがないので山の思い出は少ないのですが、卒業後彼は八王子近辺の会社の顧問をやっており、出張の際、我が家に泊まったり、近くで飲んだりして旧交を温めました。

学生時代に強く印象に残っているのはタフネゴシエーターとしての八木さんです。

幾会仲間と一番丁で焼き芋を買い喫茶店で食べたところ持ち込料を請求されましたが、彼の数十分（？）にわたる交渉で見事持ち込み料が免除になりました。

皆で彼の粘り強い交渉力に驚くやら感心したりしたものです。

恩田達也さんの思い出　6期　加藤邦明

恩田さんとは同業種の鉱山会社に勤務していた縁から、１９７７年（昭和５２年）頃に秋田県大館市から隣の小坂町の住居にお邪魔して家族で親交を深めた記憶があります。現役時代に恩田さんとパーティを組んだのは意外と少なく、１９６３年（昭和３８年）１２月の雲取山、１９６４年（昭和３９年）の秋合宿で白神山地へ行った時でしょうか、１９６５年（昭和４０年）の９月に西さんと３人で飯豊山に行ったのは良い思いです。６期生は TUWV の OB 会報への協力が少ないようで、２００５年と２０１９年しか見出せません。その間に、２００８年乗鞍高原、２０１１年松島、２０１４年銀山平、２０１６年松代、２０１７年尾瀬と同期会を開催しています。これらの中から恩田さんのスナップ写真を紹介して、ご哀悼とさせていただきます。

２０１１年、松島（向かい席左）。

２０１６年松代（相手は斎藤寿さん）。

２０１７年尾瀬。

２０１９年勝沼（右手前）。

石川誠之君を偲ぶ　7期　菊谷清

同期の石川誠之君が今年の 1 月に逝去しました。齢 79 でした。

彼は性格温厚、沈着冷静で常に穏やかな物言いをする人柄で、ともすれば結論を急ぐせっかちな仲間の多い我々同期の中ではとても信頼されていました。スポーツマンというよりも図書館で静かに本を読んでいるのが似合う学者タイプで、私と同じタイプかなと思います。（周りから、真逆のタイプだろうとの声あり！）

ワンゲル時代に彼と一緒にパーティを組んだ経験はなかったのですが、卒業後は同じ東京在住という

こともあり、親しくつき合わせて頂きました。特に彼は私と同様にゴルフが大好きで、定年後には同期ゴルフ会として千葉県辺りで毎年１回はラウンドしていました。我々のゴルフは、雨が降ってズブ濡れになろうが決して途中で投げ出さないワンゲル流で、大雨の中、他のパーティが全て中止した時でも最後までプレーを続けたこともありました。石川君のプレースタイルは性格そのもので、慌てず騒がず、じっくりとプレーするのです。よく言えばいつも冷静沈着、悪く言えばスロープレーヤーで、なかなか打ってくれないので周りがイライラすることもありました。しかしスコアが悪くてもいつもニコニコして決して腐らない大人のゴルファーでもありました。ナイスショットした時の石川君のドヤ顔を懐かしく思い出します。

大山幸則さんを偲んで　７期　真尾征雄

我々７期生は卒業時２３人いましたが、卒業後も付き合いが続き、コロナ前は幹事持ち回りで毎年のように同期会を開き、コロナ下ではオンラインで月１回おしゃべりをしていました。

２０１１年７月大山さんが幹事で、酒田で同期会を開きました。会場はご自宅の音楽ホール。出された豪華な沢山の料理は大山幸則さんが作ったとのことで一同びっくり仰天しました。学生時代、山で大山さんが料理を作っていたという記憶は全員ないからです。３８歳で実家の大山食品をついでも、それは経営者としてであり、料理がこんなに上手になったとは信じられませんでした。その後も何度か大山宅を訪問しましたが、いつも美味しい心のこもった料理を頂きました。

２０２２年５月大山幸則ご夫妻（ご自宅にて）。

あなたは５年前、癌が見つかりステージ４と診断されました。それから長い闘病生活がはじまりましたが、同期会やオンラインにも参加し、泣き言や弱音をはくことは一度もありませんでした。奥様とよく旅をされていましたね。私の合唱団の演奏会にもたびたび足を運んで頂きました。目が悪いにもかかわらず、むさぼるように本を読まれていました。入院する際、読む時間がたっぷりあるからと本をたくさん持ち込んだと伺いました。DVD やテレビで過去の名作をご覧になっていました。読んだ本や観た映画の感想を「時間があれば読んで下さい」と度々メールを頂きました。愛犬「ふくちゃん」との散歩をずっと続けていましたね。あまたは奥様の音楽活動を影に日向に支えていましたね。奥様の創作オペラ完成を楽しみにしていた幸則さん。完成し初演の日には是非天国から聴きにおいで下さい。常に前向きに行動されてきた大山幸則さん。あなたの生きざまを見て、多くの仲間が勇気づけられました。あなたの穏やかな笑顔がもう見られないのは寂しい。長い間大変ありがとうございました。

藤森英和さんを偲んで　８期　佐藤　拓哉・良子

「オギャーなら何を語りかけただろうか」、そんなことを考えながら藤森さんのことを思い出してみた。学生時代、オギャーは台原に住んでいた。その裏庭に面した一室に藤森さんが下宿していた。そんなことがあったためか、オギャーは藤森さんに可愛がってもらっていた、ような気がする。大学卒業後もずっと年賀状のやり取りが続いていたが、それはオギャーとのやり取りだったような気がする。

さて、「オギャーは何を語りかけたのだろうか」、何も思い浮かばない。多分、恐らく、何も言葉にせず、ただ静かに微笑んで見送ったような気がする。

「歩くスピードは歩幅で調整しろ」……これは藤森さんから教わったことであり、何故か今でも鮮明に覚えている。藤森さんと私の山における接点はただの１回しかない。藤森さんが３年生で私が２年生の時の、多分２次新練だと思う。サブリーダーとして数人の１年生の前を歩き、パーティーのペースを作る役割を担っていた。奥新川駅から大東岳に登るルートで、急登が続くとどうしても１年生が遅れがちになる。そんな時、最後尾の藤森さんから冒頭の指示があった。歩くテンポでスピードを調整するのではなく、歩幅で調整するということは、６０年経った今でも思い出すことがある。

藤森さんは、精密機械工学科を卒業後、精工舎に就職した……はずであったが、すぐにエプソンに変

わった。当時はほとんど知られていない会社であり、どんな会社か尋ねた時、「諏訪では有名な会社なんだよ」という返事が返ってきた。どんな会社なのかも説明してもらったとは思うが記憶になく、ただ「諏訪では……」ということだけが記憶に残った。あっという間に、諏訪から日本へ、日本から世界へと飛躍したエプソンの黎明期を支えた一人でもあった。

藤森さんは諏訪清陵高校の出身で、高校時代に八ヶ岳の大同心を登ったという話を伺ったことがある。日本有数の岩壁であり、そんなところを登った藤森さんに、「凄い人なんだ」という気持ちを抱いていた。その大同心の正面壁の中央を突き上げる雲稜ルートを私が登ったのは、ワンゲルを卒業してから実に４０年後のことであった。

新年会にはいつも諏訪から出てきてくださり、ニコニコした顔をみせてくれていました。オギャーとともにご冥福をお祈りいたします。

直江眞一さんを偲んで　１４期、１５期寄せ書き

★１４期（１９７５年卒）今　高司

１４期同期の直江眞一さんが２０２４年１１月２５日に誤嚥性肺炎を患い、去る１２月１１日にご家族が見守るなか、永眠されたとご長女の佐穂里様から連絡が入りました。

九大教授を退官して、２０１９年秋に九州から大好きだった八ヶ岳の麓（甲斐大泉）に移住されて、最愛の奥様と過されていました。

ＯＢ会の５０周年記念行事（２００８年１０月）で泉ヶ岳を一緒に登ったのが最後になりました。このときに大学ゼミの学生達を山登りに連れ出していると楽しそうに話していました。

新宿高校出身で、同期のなかではずば抜けてお洒落で、シティボーイで、スマートで格好良く、洗練されていて……とワンゲルには似つかわしくない仲間でした。全日本スカーフ普及会会長からスタイリスト賞を授与されたことは知らなかった。

２０２１年１０月、美し森にて。

彼のこぎれいなアパートで、カレーをよくご馳走になったことを思い出します。

山での NO1 エッセンのカレーも「あれはカレーではない。ジャガイモ、人参など野菜はゴロゴロを大きく、当然、肉も大きいビーフがカレーだ」と語っていました。

今年の年賀状には奥様と昨年に北の大地の富良野と美瑛に行ってきました、とお二人の楽しげな写真付きで戴いていました。

この訃報を聞く数日前にワンゲル同期ほかの仲間１５人と懇親会を行なっていたときにも話題にのぼり、八ヶ岳山麓に散策に行く計画を画策していたところでした。２０２１年の美し森の写真は長女の佐穂里様から訃報とともに戴いたものです。残念です。

同期の１４期と先日の懇親会で一緒だった１５期の仲間から思い出話を戴いていますので紹介します。皆さんと来年の春頃に八ヶ岳の麓を散策したいと考えています。心からお冥福をお祈り申し上げます。合掌

★宍戸一弥

学生時代に子平町の下宿にお邪魔したことや、東京の実家に泊めていただいたことなどを思い出しました。２５年位前、福岡に長期出張していた際に天神の居酒屋で一緒にお酒を飲んだことも記憶に残っています。春になったら入笠山に登って、直江が好きだった八ヶ岳の山々を眺めて見ようと思っています。

★奥本健司

直江君といえば、スマートさで群を抜いていましたね。何

度か子平町の下宿に直江君を訪ねいろいろ話したことを覚えています。「チャイコフスキーの曲が好きなんだよ」「もし大学に残れなかったら、子どもが好きだから幼稚園の先生になりたい」等、会話の断片が思い起されます。

いつだったか定かでないですが、冬の蔵王で登り始めてしばらくして風が強まると、無理せず下山しようと的確に判断してくれたことも印象に残っています。

私は飯盛山の登山口の平沢峠から見る八ヶ岳が気に入っています。雄大な眺めの中で直江君を偲ぼうと思います。

１９７４年、４年奈良田にて。

★三木博明

直江といえば、都会的でスマートでストイック。私とは正反対でした。

そんな彼とは、4 年の夏合宿のサポート隊？として、長野県側の戸台から北沢峠、広河原、奈良田まで山行した経験があります。戸台では駅で買った英文週刊誌（どっちが買ったかは覚えていませんが）に掲載されていた Carpenters の Yesterday Once More の歌詞と楽譜で、盛り上がった記憶があります。クラシックばかり聞いていると思っていたので、意外でした。

おかげで、その翌日の北沢峠までの登りは、おしゃべりのし過ぎで、最後は日ごろの不摂生もあってバテバテ。

でも直江は快調そのもの、さすがです。現役からは「三木さん顔色悪いですが大丈夫ですか？」といわれる始末でした。

春になったら、八ヶ岳のふもとを歩き、貴君を偲びたいと思います。

★男澤弘

直江との思い出ですが、新歓とかではあるが合宿やフリーではないですね。

我ら 14 期の中で、一番危なかった山行は多分、３年時の春合宿の直江Ｐではないかな。朝日連覇でなんと大朝日岳の頂上で雷の直撃を受けた事。全体の反省会では、少しちゃかそうと思っていたら、もうそんなところではなく直撃後は、茫然自失物理的にも相当のショックを受けたらしい。

幸いそれ以上の被害がなく遭難騒ぎにもならず、無事下山したものだ。よほどのリーダーシップを発揮したのだと思う。

この時私は須田さんリーダーのサブとして、隣の吾妻連峰にいてやはり雷が多かったです。浄土平に近い鎌沼にテントを張った時は周りがすり鉢状で､雷の音が一晩中響き寝ずらかったのを覚えています。直江とは、ゲレンデスキーによく行きました。

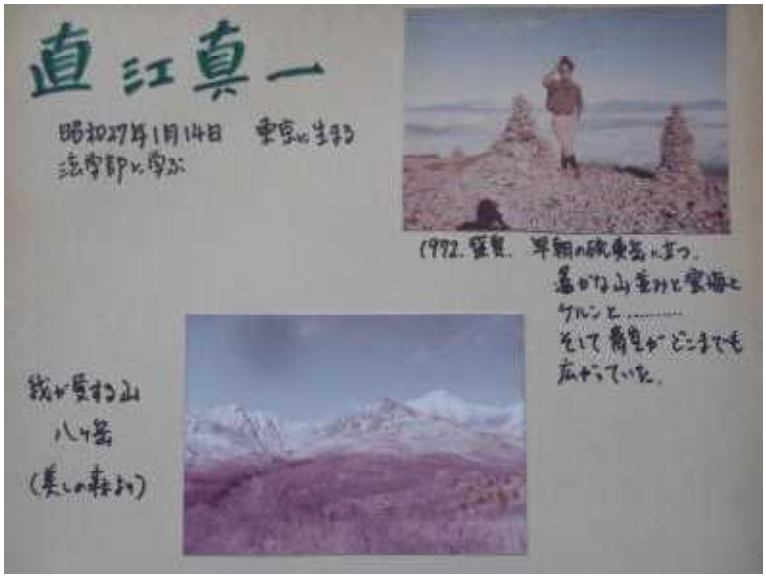
ワンゲルを卒業してから、何かのきっかけで、未来の奥さんと３人で、宮城蔵王にスキーに行きましたが、その時はよそよそしかったなー。その後、結婚の案内が来てびっくりしました。

とりとめのない話ですいません。直江が愛した八ヶ岳の景色見たいですね。

★山口みどり

直江さんはいつも首にスカーフをさらっと巻いてワンゲル一のスタイリストでした。

２年の南アの夏合宿、私は直江さんと同じパーティーでした。直江さんは荷上げのために一度塩見を下りたのですが、そのときの下りのあまりの速さに、上ってくる登山者がみんなびっくりして通してくれたと楽しそうに話してくれた声と笑顔が思い出されます。このときの南アでの夏合宿のこと、八ヶ岳の話、いろいろ話したかったなあと今更ながら思います。



７５年３月卒ワンアルバム。

★遠藤洋一（１５期）

ワンゲルでは１年先輩でしたが、都立新宿高校では同期でした（クラスは別）。

３年生の１２月、直江さんがリーダーで北八ヶ岳と清里の飯盛山に雪上訓練に行ったことを思い出しました（確か廉三君も一緒）。

★堀江博（１５期）

直江さんが３年生の時、東北大から離れた北八ヶ岳の冬山に連れて行ってもらい、ご家族から送られた訃報のメールにあった写真「美し森」のすぐ隣、飯盛山にも登ってきました。

直江さんは、５０年以上前から八ヶ岳が気に入っていたのだとあらためて感じました。

新　年　会　の　お　知　ら　せ

２０２５年１月２５日（土）１４：００～１６：００に新年会を開催します。
新型コロナ禍の影響で２０２１年から２３年の間中止していましたが、２４年から再開しました。
【会場】新橋亭（しんきょうてい）新館
（右の図の新館。現在、本店はありません）
【会費】6000 円（全７品、飲み放題コース）

＜２０２４年新年会出席者＞
（S39）松木功　（S40）小原佑一、島崎質　（S41）朝倉肇、門屋大二、桜洋一郎、佐藤豊治、谷正美、真山晃一、横山雄一郎　（S42）加藤邦明、堤正尚、青木祐二　（S43）大木芳正、大釜寛修、菊谷清、高橋直樹、村山貞一　（S44）京野忠、佐藤拓哉、前田吉彦、三原健治　（S45）石野好昭、伊藤健一、伊藤千代子、原田博夫、桃谷尚安　（S46）田中康則　（S48）神山文範　（S50）男沢 弘　（S53）小林忠　（S62）伊田 浩之
以上３２人

ＴＵＷＶＯＢＧ会　会計報告（２０２４年）
（１）収入

２４．	６．２４	ＯＢＧ会会計引継（口座残高）	２４万１３６５円
２４．	８．１９	利息	１６円
２４．	８．２７	ＯＢＧ会新年会会計と統合*	２万４３９９円

合計　２６万５７８０円

（２）支出

２４．	８．６	新印鑑代	２万６１８０円
２４．	８．６	キャッシュカード発行手数料	１１００円
		次回繰り越し	２３万８５００円

合計　２６万５７８０円

注）＊は１９９４年以降、ＯＢ会新年会会計はＯＢ会会計と別立として運用してきたが、この度一本化した。すなわち、２０２４年５月に支出した現役支援金（２人用テント購入費６万８２００円と送金手数料５５０円の計６万８７５０円）はＯＢ会新年会会計より支出し、その残高２万４３９９円を入金して、会計を統合したもの。

・「若い人の参加を促すために」、平成、令和に卒業した方の新年会の会費の半額は新年会の残金から補助しています。残金が不足した場合は、ＯＢ会の会計から補助することとしています。

★★　幹事より　★★
※ OB 会報 55 号をお届けします。多くの方から原稿を送っていただき、ありがとうございました。
※メールアドレスが変更になった方は１ページ目のメールアドレスまでご一報下さい。
※この会報は原則として OB 会のホームページにアップするだけとし、メールによる配信は行なっていません。メールアドレスがわからない方には郵送してきましたが、原則として郵送は終了しました。